



## 木の香りに包まれながら 念願のまちなか暮らし

大きなガラス戸を引くと、清々しい木の香りが出迎えます。広々とした土間で靴を脱いだら、そこがダイニング・リビング。振り返れば久松山が、ガラス戸の木枠に収まって絵画のようです。

リビングでは、2人の子どもたちが床でおもちゃ遊び。杉の無垢材が、素足に気持ちよさそう。

「家を建てると思ったときから絶対に鳥取の木を使った家を建てる決めていましたね」と、施主の林さん。平成28年12月に完成、入居しました。奥様と息子さんたちと、4人家族です。

1階の広々としたダイニングキッチン兼リビングには、存在感のある檜の柱が立ち、梁や床には杉が使われている。木材がふんだんに使われた嬉しい場合は家族を温かく包んでくれている。

無垢材の  
ぬくもりに包まれた

人と環境に  
やさしい

# 自然の家

# 活かされる木の美しさ 構造材を見せるデザインで



梁や火打材などの構造材があらわになっていて、白を基調とした部屋に美しい杉材の木目が際立つ。梁を見せることで天井も高く広々とした空間作りとなっている。

林邸は、まさに「木の家」。リビングには太い檜の柱、見上げれば立派な杉の梁。床や構造材はすべて鳥取県産の木材です。窓回りの造作材なども全て杉材が使われています。「木材を壁の中に隠さず、見せる」ことが、こだわりのひとつだったそうです。

林さんが木造住宅を希望したのは、何よりも自然の素材に囲まれて暮らしたかったから。「集成材の安全性は確認されていますが、せっかく長い年月をかけて立派に育った木ですから、そのままの姿で使いたかった」と、林さんは柱を撫でま

また、輸入木材に押されて国産材の需要が伸びず、価格が下がっているとのこと。逆にいえば、国産材を求める人には質の良い材を手に入れやすくなっているそうです。

もうひとつ、林さんには夢がありました。それは、おじいさまと一緒に植えた木で家を建てること。「祖父が、自分のために実家の山に檜を植えてくれたのです。幼い頃に苗木の前で『お前が大きくなったら、この木で家を建てられるぞ』と、言ってくれていましたから、2階の柱に使わせてもらいました。実現できて、本当に良かったと思っています」



県産材×住まい



## 冬も暖かな吹き抜けの木造住宅を実現

こうした「木の家」への強い思いに応えたのが、有限会社シェド建築設計室です。在来工法の木造住宅を得意とする代表の澤年彦さんは、木材の美しさを最大限に活かした開放的な間取りを提案しました。

1階、2階ともワンルームで、一部が吹き抜けで繋がりが、家全体が大きな1つの空間となっています。リビングの隅では薪ストーブが燃え、煙突が2階へ、屋根へと伸び、その吹き抜けから日射しが差し込みます。キッチン是对面式で、リビングを見渡しながら料理。2階には、檜のウッドデッキのベランダも。「夏になったら、ここで星空を眺めながらビールを飲みたいですね」と、林さんは夏が待ち遠しいそうです。

ともすると吹き抜けや木造住宅は、「寒いのでは？」と思われがちです。澤さんは、太陽熱や屋内の空気を循環させるシステムの導入を勧めました。「暖気が床下を巡るせいでしょうか、無垢材の質感と相まって床がほんのり温かいです」と林さんは満足そう。薪ストーブに火を入れたら、エアコンや灯油の暖房器具はほぼお休み。木造ならではの通気性を確保しながら快適な住環境を実現しました。



写真上／家族が集まる1階のリビングには薪ストーブが設置され、冬になると、吹き抜けを通して1階から2階へと暖かい空気が循環する。床板の杉の無垢材は冬でもひんやりとした冷たさを感じさせない。  
写真左上／1階の柱と梁。左中／階段の杉板は年輪を浮かびだせた海造（つくり）仕上げ。滑りにくく足裏が気持ち良い。  
左下／2階ベランダの床材。目隠しの板材も県産材の檜を使用。



1階と同じく2階寝室兼子ども部屋にも県産杉のフローリング。据え付けられた机、移動式の棚などの造作家具も無垢の木材で造られ、子どもたちの成長とともに部屋の使い方もかえられるつくりになっている。

## 生き続ける木とともに歳月を重ねる楽しみ

「実際に暮らしてみると、木の家は本当に気持ち良くて安らぎます。感動したのが、結露がなくなったこと。前の家は、冬は窓がびしょびしょでした。湿気がこもるとカビも気になりました。引っ越してから、子どもたちの体調が良くなったんです。冬の底冷えもなくなりました」。木に囲まれ、太陽や薪などの自然エネルギーで冷暖房をまかなう林邸は、まさに念願の「人と環境に優しい家」となりました。

「ときどき、家のあちこちでピシッと鳴ります。ああ、木が生きてるんだなあと感じます」。

檜は切った後、強さを増し続けるといいます。

木の家は、建てた瞬間がゴールではなく、家族とともに成長し続けるのです。

「鳥取の木を使うことによって山林を持つ人に利益をもたらし、山林で働く人の収入にもつながります。鳥取の寒暖の差の中で育った杉、檜を使って、鳥取で家を作ることは、自然な流れだと思います。それに木は、古くなっても味わいが出ます。歳月を経たとき、この家がどんな雰囲気を出してくれるのか楽しみです。子どもたちの成長を見守りながら、木と一緒に年を重ねていきたいですね」。木々にとっても、新たな生の始まりです。

(2017年2月取材)

## とっとりの山がつくる「家」

県産材を使った家づくりを提案する建築士の澤さんにそのこだわりをうかがいます。

家を建てるのに昔は、まず必要な木材を山から木を伐り葉をつけたまま乾燥させるところから始まり、川を利用して運搬、じっくりと乾燥、そして製材し、建てる前に大変な時間と手間がかけられていました。また木が切られた後の山には、何十年後に使われるであろう木材として、新たに木が植えられ次世代に備えてきました。木の家を建てるということは、山を循環させることにつながっているのですが、近年はそんなサイクルも薄れています。わたしが在来工法の木造設計にこだわるのは、現在では失われてしまった循環の復活や山の活性化に繋がるのでは、という思いがあるからです。

住宅を木造で建てたいと考えられている方には、使用する木材に県産材をお勧めしています。鳥取で育った木材をそのまま鳥取の家に使うので、湿気や温度など環境変化に無理がないわけです。鳥取の木の特徴としては、山陰の冬は厳しいため、針葉樹が育つには年月がかかりますが、年輪が詰まっていて木が硬いということでしょうか。また県産材を使うことで県からの助成金も受けられます。

家づくりは木材だけでなく職人さんたちの技も欠かせません。「いい家」というのは、多くの人の手や技、思いの結集体でできるのだと思います。



県産材を使った鳥取市内の住宅。構造体や内装はもろみんのこと、外壁やデッキなどにも使用している。



photo:IKEMOTO YOSHIMI

有限会社 シェド建築設計室  
代表 澤 年彦さん

鳥取市東町2丁目301-2 <http://shed.jp/>

平成22年度鳥取県木の住まいづくりコンクールで「最優秀賞」受賞を含め多数入賞。スローライフな住宅を提案し続けている。